

白山ふるさと文学賞

第二回 白山市ジュニア文芸賞 受賞作品

【島清部門】

中高校生作文の部 優秀賞

三年間の力

鳥越中学校三年

橋本

ひかり

受賞の言葉

3年間、つらいことや苦しいこともあり
ました。ですが、たくさんの人の支えでそ
れを乗り越えることができ、今の自分がい
ます。

このような素晴らしい賞を受賞したこ
と、そして色々な人が支えて下さったこと
を本当にうれしく思います。

六月十五日、私の中学校生活最後のバレーボールの試合があった日です。この日は、私にとって忘れられない思い出となると共に、私が変わるきっかけとなりました。

私の中学校には、女子の部活動がバレーボールか卓球しかありませんでした。私は、ずっとどちらに入るか悩み、結局、仲の良い友達がいるからという理由でバレーボール部に入りました。

運動が得意でない私にとって、最初の一か月は地獄でした。毎日ランニングコースを三十周以上走り、その後は筋トレ。そしてひたすら声だしとボール拾い。周りの皆からいつも置いていかれてる感じました。三年生の先輩が引退して、私たち一年生が本格的にボールを触って練習を始めました。この時も、トスやレシーブ、スパイク、サーブ。どれを取っても一番下手でした。休憩時間も練習して、家に帰って一日の反省をして、でもあせりが込み上げてくるだけでした。

そんなある日、ペアを組んで練習している先輩に言われました。「ひかりはいつも一番大きな声を出して頑張っているね。」

その瞬間、スーッと心の中のおもりが消えたように体が軽くなりました。それからは、大きな声を出すことに精一杯力を入れました。またしばらくたったある日、先生に言われました。

「ひかりの声はチームの雰囲気を変える力がある。ピンチの時は元気が出るし、チャンスの時は余計に盛り上がる。」
嬉しさで、顔がゆるむのをおさえられませんでした。私でも役に立てることがあるということは、大きな自信になりました。

先輩が引退して、私が最上級生になった時、うまくやっていける心配で、不安がつのりました。私は副部長となり、部長と何度も話し合いをしました。これからどういふふうチームをまとまていくべきなのかということ。うまくいなくて、けんかしたことも何度もありました。でも、その度に仲直りをして、チームの結束力は強くなりました。

私が骨折したこともありましたが、大事な新人戦を間近に控えた、予備選でのことです。もちろん新人戦には出られず、私たちのチームは六人

しかないため、後輩から一人引張ることになりました。二か月程度活には参加できません。ただの足手まといにはなりたくない、大きな声で応援したり、ボール拾いなどの手伝いをするのを頑張りました。その時部長に言われました。

「あんまり無理しなくていいよ。ボール拾いとかしてくれて助かるけど、足治すことが一番大事だからね。早く良くなって一緒にバレーしよう。」
他人ごとのように感心してしまいました。メンバーが一人欠けていて、今一番大変なのは部長である彼女のはずなのに、周りを見て、そっと声をかけて、何事もなかったかのように練習に戻る彼女は、とても良かったです。

そして最後に、ブロック大会です。相手は格上のチームでしたが、練習試合を沢山して、勝てるという自信を持って臨みました。一セット目、最初はリードをうばわれました。ですが、少しずつ巻き返し、追いつくことも何度もありました。競って競って、最後はこちらのミスで終わりました。二セット目。またも、最初にリードをうばわれました。負けるかもしれないと、私が弱気になった時、セッターの「切りかえていくよ」という大きな声で、その場の空気が一変しました。そこからこちらもまた巻き返しましたが、ついに向こうがマッチポイント。向こうのサーブを何とか上げて、次はこちらのサーブ。丁度私の番でした。サーブの調子が悪く、一番きてほしくないと思っていました。そしてサーブはオーバー。アウトになって試合終了。涙すら出てきませんでした。終わったという事実を受け入れられませんでした。学校に帰ってミーティングをしている途中。三年間の感想を私が言っている時です。急に涙がこぼれました。

三年間、私は部活を通して沢山のことを学びました。心が折れそうになった時に支えてくれる仲間、自分の役割、必死になって頑張ったこと。その全てが六月十五日に集まりました。その瞬間、私の三年間が終わると共に、新しい道がひらけました。次の一步を踏み出すための力となって、これまでの思い出が私の中にいつまでも生きています。